# 12.龍（ドラゴン）の門出（デパーチャー）

アズリアは、胸元のリボンを留めていたブローチを外すと、そこにはめられているお守りのアズライトにふっと息を吹きかけた。

美しい菱形にカットされた宝石が、細かい青い砂のようになって吹き流されて、たちまち形を失っていく。
彼女の意図を察した仲間たちが駆け寄ろうとしたが、もう遅い。こんなだまし討ちみたいなことして、ゴメンね。しかし、これだけは譲れなかった。ミトナとセスリの子供が生まれてくる世界を残しておかないといけない。かつてソウラの両親たちを奪ってしまった負い目もある。だが何より、単純にこのアストルティアのことが好きになりすぎていた。あたたかく、優しく、厳しく、時に残酷に、湧き上がる好奇心と冒険心を無限に吸い込んでいくようなこの世界の空を…。

彼女をアズリアという女の子でいさせてくれた、素敵な名前（おまじない）を解く。
結局彼女は純粋な意味での<仮面（ペルソナ）>ではなかったらしい。<原質（アルケー）>そのものとも、ちょっと違う。<原質>の観測器官だけを肉の体に封じ込めて、一人歩きさせているような状態だろうか。本来なら<原質>だけがもっているエクステンション・ラインを与える権限があるのだから、きわめて<原質>に近い存在でもあるが、絶大な生命力を秘めた龍の肉体に比べて、圧倒的に虚弱なヒトの肉体にその生を依存するのだから、かなり危うい状態であるといえた。しかし、そうする必要があった。<火（レム）の夢（ナス）>という、<夢幻（レムネア）>のままでは決して受け入れられない存在と、もう一度一つになる。その戸口として、肉から生じた無垢な心を、一から育てる必要があったのだ。

ソウラたちの見ている前で、人間の女の子としてのアズリアの姿がゆがみ、霞んでいき、いつのまにか遥かに巨大な、純白の龍がたたずんでいた。まさしくソウラが子供の時に出会った、嵐の龍の姿であった。
白い龍はふわりと飛び立ち、片割れの黒い龍に向かって飛んでいく。レムナスは怯えたような金切り声をあげて、炎を吐き出した。みるからに熱そうな、地獄の底から噴き出したような赤黒い炎だった。迎え撃つようにレムネアも炎を吐いたが、それは海底離宮でアスキスの体から吹き出したような、なにも焼かない、ただ暖かく優しい、虹色の炎だった。
二つの炎は混ざり合い、中和して、向かってくるレムネアを傷つけることはなかった。かつて嵐の海でそうしたように、押し倒して、雷で打ち据えるようなことはなく、レムネアは静かにレムナスの傍らに降り立った。最初戸惑ったように後ずさるレムナスだったが、穏やかに見つめるレムネアの瞳に応えるように、二頭の龍は鳴き交わしはじめた。

かつて大魔王マデサゴーラによって、二つに分けられた龍たちが合一し、あらためて<夢龍レムノン>として生まれ直す。そうすれば二つの心は安定して、争いがおこることはない。だがそのためには、一度アズリアという肉の体から生じた心は解きほぐして、正しく<原質>としての知性に戻る必要があった。人の心が龍の心を受け入れるには、質も量も圧倒的に足りないのだ。

最初不協和だった二つの鳴き声が、鳴き交わすうちに少しずつ調和していき、やがて一頭の龍の遠吠えのような、歌のような音に変わっていく…。

アズリアを追った冒険者たちに置いて行かれて、レムナスの＜仮面（ペルソナ）＞は途方に暮れた。かれの主たる＜原質＞は、これから片割れの龍と一つになって、安定する。自分はどうなるのか、あの少女と同じように心を解きほぐされて、＜原質＞の中に還っていくことになるのか。それも不安だった。自分はあの少女のように納得していない。ずっと未来から逃げてきた。精一杯生きて、世界とぶつかって、自分の有りようを確認するということをしてこなかった！あそこに帰れば恐怖や憎しみから解放されて、安らかになれるよと言われても、納得などしていないのだ…！

かれは痩せっぽちな肩を抱えてさめざめと泣いた。かれは事故で偶然この世界に放りだされたに過ぎない。それがなんだ、この報われなさは。自らが消えることに対する恐怖は、彼が生来持っていた、未来に対する不安とはまた別の感情だった。せめてもう少し時間が欲しい。自分を見つめなおし、与えられた生に納得するための時間が。これでは惨めで、寂しすぎる…！

「じゃあ、貴方も僕たちと一緒に来ますか?」

そう声がして、ひょいと摘まみ上げられた。見上げると、悪戯っぽく笑うエストリスの顔があった。

さようならと、言葉で伝えられなかったのは、ちょっと惜しかったが、あの状況では仕方がなかった。遺言とか、遺書を残すというのも何か違う。彼女は消えてしまうわけではない。記憶も残る。まあ、太古龍の高次の知性からしてみれば、記憶というよりも記録と感じられるようなものになるのかもしれないが…。

彼女の心は解体されて、もっと大きな知性の一部分になる。太古龍の視座からは、人の心はせいぜい絵本の登場人物のような、もっと悪く言えば落書きのようなものとしかとらえられない。それでもたまに思い出しては、甘酸っぱい思い出に浸ることもあるだろう。このアストルティアに生れ落ちて、仲間たちと旅した日々を、むなしいものと感じることもない。少なくとも＜原質＞たちは、そんな落書きたちの生み出す物語に興味を持ち、ずっと見守り続けていたのだから…。

こんなにも愛して、身を捨ててでも守りたいと思えるようなものに巡り合えた。アズリアとしての自分の生は、素敵なものだったという確信があった。それが彼女の納得だった。

思惟が急速に広がり、世界のとらえ方が徐々に変質していくのを味わいながら、かのじょはこれまで数年の冒険の記憶をのんびりと反芻していた。割れた卵から這い出て最初に見たキョトンとした少年の顔。今から思えばあの時から一目惚れされていたな。後から女の子が一人称ボクなのは珍しいと聞いたが、あの時はギブの言葉が一番言葉を理解するうえで参考になったので、そうなってしまったのだ。あとうりぽの諧謔に引っ張られて、最初の頃の自分の言動はけっこう奇矯だったような気がする。

JBやユルールたちとの出会いも刺激的だった。大人のカオスさはおっかなくも興味深いものだったし、世界規模の稀有壮大な冒険譚は胸の躍るものだった。ちなちなはこれからソウラとどうなるんだろうか、というか、ソウラのことだから、またほかの女の子に声をかけられたらどうなることやら、やれやれ…

幽霊海賊のみんなは、ぷらっぺ一座のみんなは、ヴェリナードの人々は、ルシナ村の、太陰の一族の人たちは…

・・・・・・・

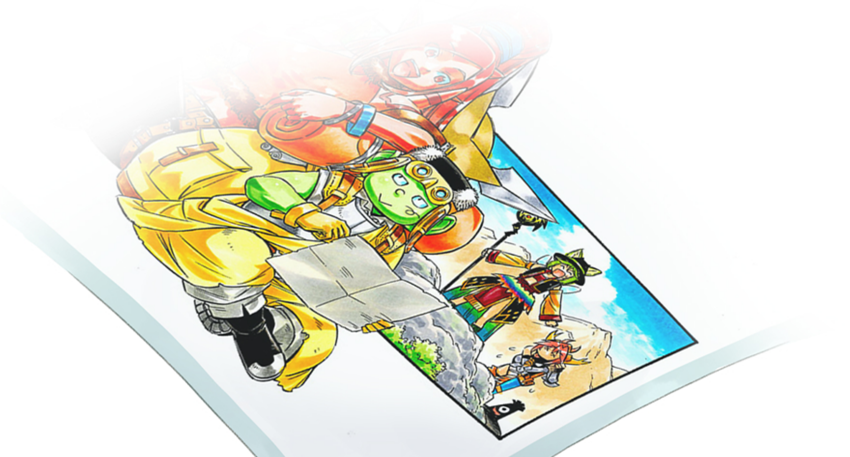
あの、なんとかいう女の子は、あれで本当に…。

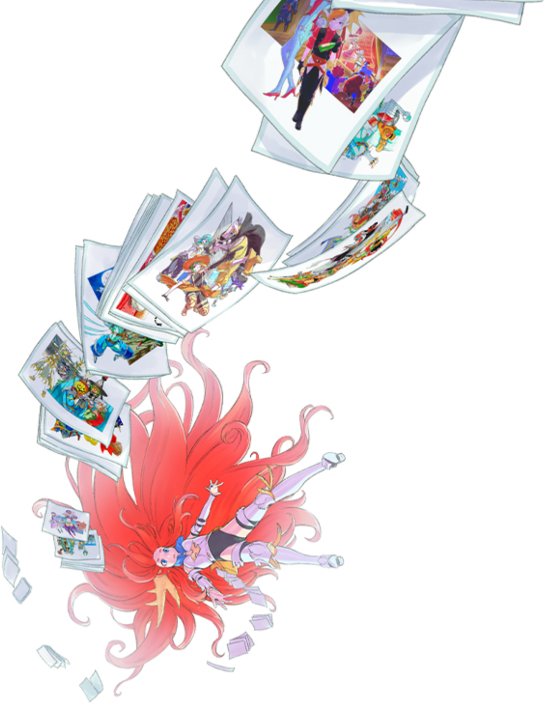
もう、あの頃の名前も思い出せない。その手掛かりも、自分で消してしまった。人は自身の変節すらも疑うことができる。だから、カルサドラ火山の時のように後戻りができないようにしてやった。それは、うまくいった。踏ん切りがついた。これでいい。これでみんな、救われるのだ。あとは眺めているだけで、やがて悲しさや寂しさという感情からも解放されて、あとは今の心のあり様を超越した視座を得て、あとは…あとは

あとは…

彼女がこれまで<自分だ>と感じていた体も、心と同じように、ふやけて、おぼろげになって、夢の中に溶け出していく。体の外側から、光の粒子のようなものに変換されて…腰に下げていた剣や盾が消えて、その下のポーチの…ボタンがまず消えて、開いたポーチから中身がこぼれだした。

薬草やどくけしそう、マッチやロープなど冒険の必需品、非常食やこっそり入れていたお菓子、それから…





グレン城でサーニャとミラナからもらったカメラで、ずっと撮りためてきた写真が、夢の中に吹き散っていく。

**甘酸っぱい思い出に浸る…！？**

**冗談じゃない…！！**

嫌だ！

嫌だ嫌だ嫌だ！！嫌だ！！

新しい視座を得てとか、そういうのいいから！ボクは！今！この心で世界を感じていたいの！！

消えたくない！消えたくない！消えたく！ない！！

ああ…！馬鹿な、馬鹿なことをしてしまった。格好をつけて、背伸びして、取り返しのつかないことをしてしまった！こうなることは分かり切っていたのに…！！

どんなにズルくても、ルール違反でも、矛盾していても，嘘をついても、誰かを傷つけても、世界を壊してしまっても…！
自分が消えてなくなるなんて、受け入れるべきではなかった。たとえそうしなければ、ものの数刻で、世界が消えてなくなってしまうとしても
納得なんて、嘘っぱちだ！！やりたいこと、行きたい場所、知りたいこと、まだいくらでもある。あの少年とだって、添い遂げていない。ああそうだ、あの少年だったらきっと、ボクが世界の裏切り者だと知っても、最後の瞬間までその腕の中に抱きしめていてくれただろうに…！

かのじょを構成する全てのディティールが、眩い光に飲み込まれていく。

こんな消え方は、終わり方は

嫌…！！

涙でぐしょぐしょになった頬を、拭って、拭って…
まだ頬っぺたも、腕も、消えていないことに気づいた。

潮騒が聞こえる。

瞳の前から手をどかすと、そこは、どこかルシナ村を思い出させるような、白くてきれいな砂浜だった。空は晴れ渡って、風は優しい。そして

もう大丈夫よ。よく頑張ったね
あなたをあなた足らしめているのは、もうあなた自身の歴史なのよ。自身を持ちなさい。あんなにたくさんの思い出に囲まれているじゃないの。

目の前に、女の人が一人、立っていた。

かのじょそっくりの長い赤髪で、彼女よりずっと大人びている。ちょっとだけあのアビーにも似ているような気も…ああそうだ、アビー。まだ名前、忘れていない。そして、ボクは…ボクの名前は…

「はじめまして、アズ。ようやく会えたね」

にっこり笑って、女の人が話しかけてきた。

「…おかあさん…?」

夢幻龍レムネアは、かつて悪夢龍レムナスと相打ってその顕現を一時的に食い止めた。レムナスは一度眠って傷を癒そうとするだろう。自分も同じことをすれば、次に目覚めた時こそ世界を滅ぼしてしまうかもしれない。だから、戦うのではなく、レムナスの心を受け入れて、もう一度一つになる準備をしなければならなかった。そのために、肉から生まれた心を一から育てることを考えた。

だから、心の一部を切り分けて、肉の体を与えて、残りは眠って傷を癒しながら、見守るしかなかった。他者との出会いを促すために、ちょっと状況を脚色したりもした。因果を書き換えて、千年も昔の遺跡の中に祭られていることにしたり、生まれてくる女の子にぴったりの(レムネアの好みの)着るものを用意してみたり…。

太古龍は、あまりにも進化しすぎていて、個体でその生命をほぼ完結できるような生き物である。ひょっとしたら宇宙の消滅と生成のサイクルすら乗り越えて存在し続けられるかもしれない。アストルティアで発生した生命ではない。アストルティアが創生されてからずっと進化し続けたとしてもここまで完成した生命になる時間はないし、なる必要もない。星の海を渡るような生態でもないと、ここまでになる必要はないのだ。

だから、子孫を残すような生態も持たない。進化が必要なら、自らを自在に変えればいい。しかしこのような事態はイレギュラーだ。わざわざ未熟な肉体に血を分けて、まっさらな魂が育つのを見守る必要が出てくるとは…。

けれど、アストルティアの人々の夢の中から発生した影響なのかもしれないが、レムネアには、それはとても素敵なことに感じられたのだった。

彼女は、アズリアの冒険をはらはらドキドキしながら見守っていた。彼女が傷ついている時には、そう仕組んだ後ろめたさに苦しんだりもした。そしてなにより、望む幸せを手に入れて、生まれてきたことに納得してほしかった。だから、全てが終わった時のために、ずっとここで待っていたのだ。

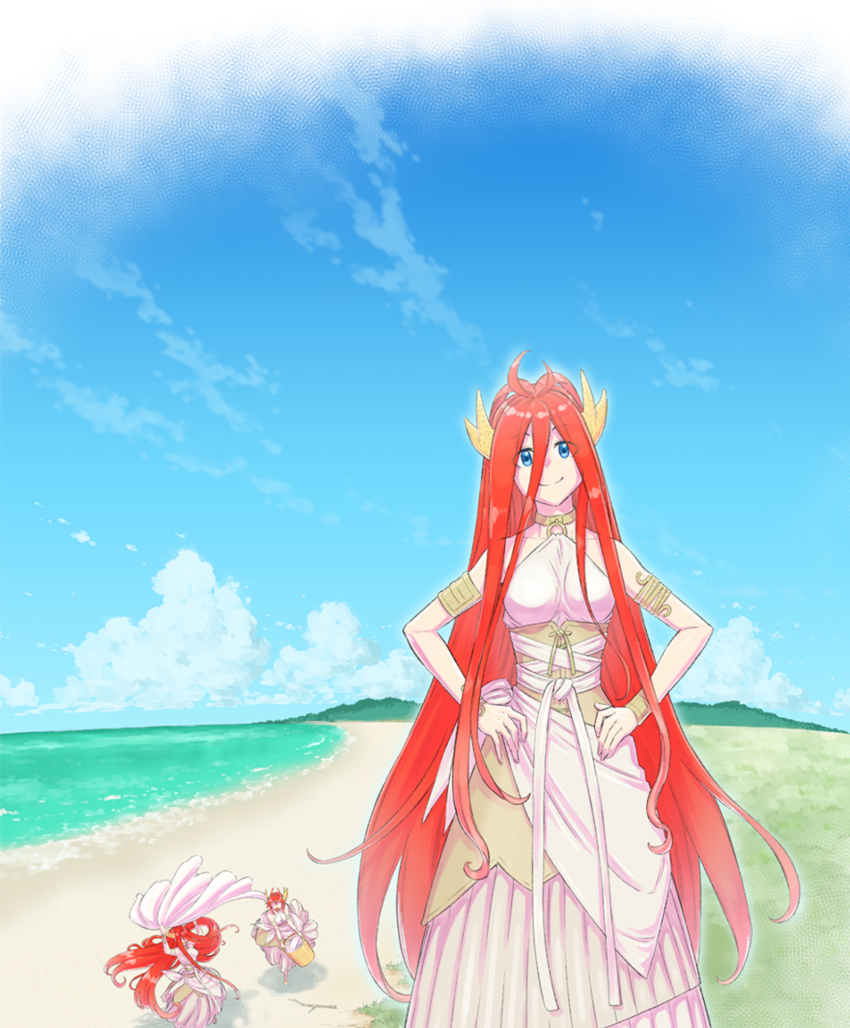
「アズリア、いい名前をもらったわね。この青い空みたい。私が付けたかったな。ちょっと焼けちゃうわ」

「おかあさん!」

アズリアは、母の胸に飛び込んだ。はじめて会ったはずなのに、そうしてもいい人だということが匂いでわかるのだった。わんわんと泣いて、今まで怖かったことや、寂しかったことをぶちまけた。こんな目にあわ

せてくれたことへの恨みごとも言った。そして生まれて、いろんな場所へ行って、沢山の人々に出会えて、楽しかったこと、面白かったことをいつまでもいつまでも話した。そして

一緒にご飯を食べたり、洗濯をしたり、昼寝をしたり、恋バナをしたり、他愛もないことをたくさんした。今までできなかったことを思いっきり埋め合わせた。そして…



太古龍たちはね、もともと私たちを迎えるために、この世界を訪れていたの。永い永い時の間、星の海をわたって、新しい仲間が生まれるのを見守りに来てくれていたんだよ。
お母さんたちはもうすぐ旅に出なくてはならないの。また次の仲間を探しに行くのよ。
星の海を渡るような生き物が、土に依存する生き物の世界にあまり長く居座り続けることは、いろいろと具合が悪いしね。一緒に来てくれてもいいんだけど、あなたはまだこの世界でやりたいことが沢山あるわよね…。
だからあちらさん、レムナスさんとは、おかあさんだけで行くね。ちょうど向こうも、なんでかペルソナの方が戻っていないらしくて、つり合いもいいみたい。ホントはまだ、子離れなんてしたくないんだけど…あなたもう、沢山の仲間や友達や、一緒にいたい人がこの世界にいるんだもんね。

じゃあ…じゃあいつか、ボクたちの方がおかあさんに会いに行くよ！ボクの子供とか、子供の子供のずっと子供とかかもしれないけど…

あら、それって…素敵ね！

母子はにっこりと笑い合って、抱き合って、互いの匂いを胸いっぱいに吸い込んだ。

目を開けると、仲間たちが心配そうにのぞき込んでいた。最後の戦いに出かけたポポリアきのこ山だったが、送り出してくれたイッポリトの姿はなかった。
いつもの胞子の霧が珍しく晴れて、青空が見えている。その向こうを、六つの光の筋が、どこまでもどこまでも高いところまで伸びて…

「やれやれ、またここに戻ってくる羽目になるとはのう」
どっこいしょ、とプラクゥが椅子に腰を下ろした。別に一人でもいいといったのに、結局ゾフィーヌとプラ

クゥもついてきた。過ごしやすくなるよう少々手を加えたが、ここはかつて彼らが捕らえられていた、時空の牢獄である。緊急避難用に取っておいたのだった。

一度入口を閉じてしまえば、また数百年は内側から出ることはできなくなってしまうのだが、まあこの時代のパトロンもいなくなってしまったことだし、ほとぼりも冷まさなくてはならない。しばらくはのんびりと研究の日々を過ごすこととしよう。

それに、こいつもこの時代に放っておけば、またなんぞ悪さをしでかして、今度こそ退治されてしまうかもしれない。今はへとへとにくたびれて、エストリスの胸の中で眠っているが、そのうち目を覚ますだろう。また暴れられて手を焼くかもしれないが…。

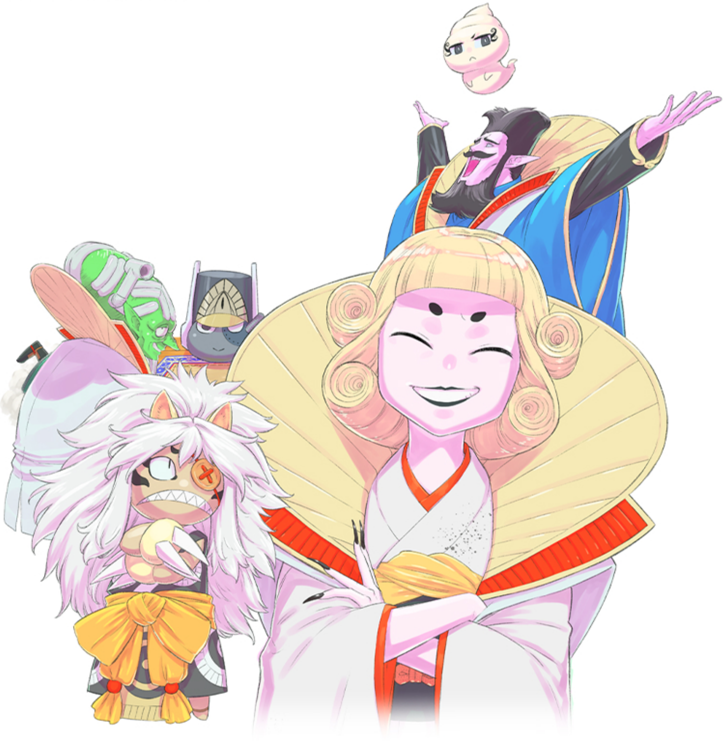
けど次は、もう少しうまく付き合えるような気がするのだ。お互いまだまだ業が深い。これからの長い旅の道づれに、悪くもないと思ったのだった。

にしてもアビーの奴、勝手に一抜けしやがって。いつか自分たちも、あんなふうに心が解放される日が来るんだろうか…。

「久し振りの長期休暇である！ほらほらエストリスも、こっちきて一緒にバトエンするのであ～る！」

「バトエンかよ」

まあ、人の世に悪が尽きることはない。しばらくのんびり過ごしていれば、またどこぞの悪党からお呼びがかかることもあるだろう。今は疲れたんで、業と向き合うのはそれまで取っておくことにする。その時は、アイツらの子供たちをからかってやるのも悪くはないかな。手札の鉛筆を選びながら、そんなことに思いを馳せて、シシッと笑った。

卓の上では妙に目つきの鋭いホイップゴーストやら、帽子のスライムボーグやら、髪のふさふさなニードルマンがちょこまかと動き回っていた。彼らもたいがい年季の入った悪党である。余った龍の血をちょっとがめておくくらいのことはするのだ。